

「お口ぼかん」が幼児の日常生活に与える影響について

著者	中村 美紀, 吉田 幸恵, 八木 孝和, 氏橋 貴子, 水村 容子, 西保 亜希
雑誌名	神戸常盤大学紀要. 別冊
号	16
ページ	8-8
発行年	2023-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1492/00001171/

「お口ぼかん」が幼児の日常生活に与える影響について

中村 美紀¹⁾

吉田 幸恵¹⁾ 八木 孝和¹⁾ 氏橋 貴子²⁾ 水村 容子¹⁾ 西保 亜希¹⁾

背景と目的: お口ぼかん(口唇閉鎖不全)は小児を対象とした疾患である口腔機能発達不全症の症状の1つである。口腔機能発達不全症は自覚症状があまりない場合が多く、放置すると口腔疾患に留まらず、全身疾患にも影響することが報告されている。しかし、口唇閉鎖力自体が幼児に与える影響について報告する文献は少ない。そこで本研究では、口唇閉鎖不全と栄養状態(肥満度)を調査することにより、口唇閉鎖不全が幼児の日常生活に与えるについて明らかにすることを目的とする。

方法: 3歳から5歳までの健常な小児56名を対象とした。口唇閉鎖力は口唇閉鎖力測定器にて測定し、測定値が正常値以下を口唇閉鎖不全とした。栄養状態のうち肥満度はカウプ又はローレル指数により判定を行い、正常値より指数が高いものを「肥満」、低いものを「やせ」とした。口唇閉鎖不全と肥満度についてはフィッシャー正確確率検定にて検討した。

結果: 口唇閉鎖不全を認める幼児は全体の69%であった。口唇閉鎖不全と「肥満」に有意差は認めなかったが、口唇閉鎖不全と「やせ」の間には有意差を認めた。

考察: 「やせ(低栄養)」は幼児の発達に悪影響を及ぼすことが報告されていることから、口唇閉鎖不全は幼児の発達に悪影響を及ぼし、日常生活にも影響を与える可能性があり、注意が必要であることが示唆された。

1) 保健科学部口腔保健学科 2) 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科